りしが一人の馬丁は小馬のブローニーを引きて彼の門口に來れり時に彼の父はロバートに打向ひ「汝我が愛兒よ！汝去る頃己の困難をも省みず哀れなる老夫婦を救ひしことあり且つ之を他言せざりしは誠に平素訓誨せる「善行ヲナセ而シテ之ヲ語ルナ」と云へる諺にもよく通せるものなれば贈り物として余はこの小馬を汝に與へん」と蓋し父は醫者より彼の善行を聞きしものあり、彼はこの言を聞き且つ驚き且つ喜びしがやがて小馬を受取りて樂しく新年を送るならん諺に「善をおさば善報あり」と宜なる哉若し彼にしてこの善行なからんには此の幸福を得ること能はざりしあり。（終り）

予が住ひの記

第五年級　中村竹坡

獨燈の影にうづくまりて、つら〳〵人生を感ずるに、世は昔あがらに無常轉變の理を改めず、人は歳月の谷間へと落ち行くありけり、實にや人生五十是刹那の夢のみ。

さはれ迷へば南山の齡も短く、悟れば蜉蝣の一期も長きぞや。蓋し今の代の人徒に僞の名利に心迷ひて、とはに眞理の光を空しくし、只露の命を果敢なむ。さしもに多き人の數、恒河の沙さてはみ空の星に等しからむに、正しく人生の眞相を知りて大悟徹底光ある生を送り、さては遠き行末の福ひにつきて、樂しき幻想を描く人ぞ稀なる。淺間しきこと何物か是れに過ぎん。我れ一時青雲の大志にひかれて、それ大政治家、それ大富豪、管手に唾して得られむと心空にはやりしが、そは終に予が志す星ならざりき。運命の矢は早くも射背けぬ。我れは夢醒めぬ、利名是れ畢竟僞の世の芥なり、別に眞理の月は照せり、手折らずもその光を仰ぐべし、いでや屈原を學ぶにはあらねど、濁世の外に遊びて自然の大光を理想とし、名利を捨て〻ひたすらに詩文を唯のすさびにはち、優なる住ひをしも送らばやと、我れ曾て一年故郷ふり捨て〻山河三里隔つる市門に遊び、已に三年の春迎へたる今、僞多き人情の流れを出で〻、自然の色よき故郷に歸り、父母のいまします恩愛深き家底より、校に通はんとぞ決しぬる。そも我が理想のふる郷よ、水流れ山聳ゆるしづけき村里よ、あゝ清き詩人も住まむずらむパラダイスよ。

我が庵はわびしき二間の小齋にて、古き屋根苔さび、南の面竹椽を架す、竹籬の外清流響き、窓間青山を望む、佇立小なれど我が心づくしの風流をつくしけり、人の命は限ありて、人の慾は限りなき世に、始皇の阿房宮に住ひても倦む事を知らざれば、猶ほ原憲の蝸廬より狹くは感すべきに、我れ心も頓に俗塵を隔てたる身のいかで憂ふべきや、ましてさるに小さき茅庵も、その占むるある自然の大光に至りては、靈偉なるをや。

平野茫遠、南東北の三面は、碧山一帶蜒蜿圍繞し、巍然と雲を凌ぐ膽靈の二峯、影西の方廬外の清波万里に連なる琵琶の湖面に低く落つ、村家半ば白烟に孕まれて、あたり流る〻清き天野川、實にや是れ秋空の銀漢ぞかし。

あゝ山高水長自然の大景色ならずや。

歌道數寄の翫ありて、富緒川の清き流れを汲み、淺香山の古跡を踏みて朝風弄月に心痛ましめたりけむ西行のそれにも似て、つたなき我れ、かゝる所に庵を結び、自然の逍遙子たるを得る、身に餘る幸ありけり。かくて我はいたく天野川の邊を愛してしば〳〵杖を携へぬ、川は田舍の風景の精神と言はるべきものありとや、實に天野川、林を縫ひ行く水の流れ清く、旭日輝く伊吹峯の曉より、夕日殘らんが琵湖の暮に至るまで、刹那々々にあたりの風色を新にし、一日の變化に無限の生命を與ふるさへも一方あらぬ詩趣を備ふるものありけり、春桃の花の艶、秋紅葉の錦又なき莊嚴ありき。

ある時予磯山の岬を辿りぬ、斷崖千丈白浪碎けて聲あり、今し波上に錦帶を曳きし夕陽、うすれゆれて、白帆入江に隱れゆく、暫見すれば金龜の孤城杳靄の間に彷彿たり、あゝ好景よと我れは青松の下蔭さがしき岩角に倚りぬ、やがて仰げば、蒼空一碧星光無數、俯すれば明鏡又燦として、萬點の明光を映ず、我れはさこそ行末を思ひて夢路に入りぬ、清き星の一點胸に宿りてありしありき。

秋の夕暮琵琶湖畔に遊びぬ、眉雪の如腰弓に曲れる漁翁の汀石に釣竿を垂れ、蘆花淺水の邊白鷗の游ぐを見ぬ、あゝ彼等浮世の榮辱を知らで、こゝ江山の風月と共にとこしへに生涯を送る、あゝその淡き事よ、我れもかくは望みし。

唐に瀟湘、我れに近江の八景あるが如く、我が鄉も亦あり、

鬼橋の夕照、　蓮成寺の晚鐘、
天王の夜雨、　藥師の秋の月、
二つ川の歸帆、　こみ田の落雁、
碇の暮雪、　神明の晴嵐、

かくて我れ遊びて趣を了しぬ。

あゝ我が鄉は山水鄉あり、世界に於て唯の山水國ある我が國に於て、我が鄉は屈指の山水鄉あり、知らずや琵湖は神州第一の大湖にして、膽峯は往昔の靈趾あり、我れ悠然としてかゝる自然のパラダイスに一年を老へたり、いかに幸多かりしよ、猶行く末はよに福ひあるらむよ。

深淵のほとり

第五年級　林　正　義

水青き深淵のほとり、石地藏の如く、我只一人たゝずめば、をちの畑中には畫の如き馬士の笠見え、大空の赤き雲の下には、風情ある哉、夕鴉の一むれ。綠ある水面を見れば、汀によする小波もおく、跳ね上る魚影も見えず、草木生ひ繁る岸邊に小舟のあらぬは云はずもあれ、そこには只幽寂のおもむきあるのみ、淵の名を川兒淵といふ、われはこの名を聽く毎に、滂沱たる涙と綿々たる恨みとは、滾々としてわく泉のそれにも似たり。忘れもせじ、去年の夏、わが親しき友は、この深淵に陷りて、遂に黃泉の客となりしなり。あはれ蒼茫たる川兒淵の水は、依然として舊態を更めざれども、我が忍べる友は逝ひてまた還らず。げにや過ぎこし方は春の夜の夢なりき、さなり夢なりと思ひ定むれど、猶情にもろきわれは、自らはふり落つる涙をとゞむること能はざるなり、あゝ深淵のほとり、たそがるゝまに〳〵、我が愁思はいよ〳〵深うなりゆきぬ、いで、友を忍んで我が感慨を癒えしめん哉。

我と亡き友とは、洵に兄弟の如かりき、されば我よく友其人を想見するに難からず、月影光りなき浮世を脫して山中に飛遯し、風月を友として煙霞を餐し、泉石に飲み白雲を往來し、麋鹿と悠遊し、曉の雨にゆあみ

して、夕の風にくしけづり、晏如枕を高うして眠らんとするは、是れ友が志す所、萍の浮ぶが如く蓬の轉ずるが如き、人世に處して、寧ろ我は其志を喜ぶものかり。見よ漢の四皓は南山の洞に住み、晉の七賢は竹林の庵にかくれ、或は首陽の山に蕨をとり、潁川に耳を洗ひし人もあるにあらずや、然れども友は徒に世を避け跡を晦す厭世家にはあらず、神洲の快男子として恥しからぬ稜々たる意氣を有せり、嘗て日本魂の本旨を論じて云へらく「日本魂てふ精神は、即我國の精神にして、我國人の心かり、天に懸りて皎々たる日月の如く、地にありて爛熳たる櫻花に似たり、大節に臨んでは死をも辞せず、正義の爲には身をも顧みず」と、想ふに友が清廉高潔の精神たるや、天に在りては煌々たる日月も明を隱し、地に在りては嬋娟たる櫻花も麗を收むべし、今や君は風月を脫却して、煙嵐たえざる淨域に遊び、一基の浮圖の下、蓬海の清き水に其纓を濯ひて、御佛の啓示の聲を聞き、閼加井の水に其足を洗ひて、瀟洒たる蓮の臺に眞如の月の光りを享けつゝあり、是れ友が羽客たらんの志遂げにしものか、然れども秋霜凛々たる三尺の日本刀を揮つて、大和魂を持有する神洲男子の本領を現はもこと、いつの時にか得らるべき、あゝ友が魂は怡々として地下にあるか、はた慘々として宇宙に迷へるにか、悲しい哉、我は遂に昊天の無情を怨まざるを得ざるかり。いかに、人の一生は夢の如く、廬生黃粱の一炊の間とはいへ、よろづは朝顏の朝の盛り稻妻の宵のほのめきに似たりとはいへ、天何すれぞ我友を奪ふのしかく早き、つひにゆく道とはかねて聞きしかど、かくも非業にかくも早きを思はざりしを、天に哭すれども答ふるかく、地に慟すれども應ずるかし、噫。

未だ友が世にある程は、さほどにも感せざりしが、悲しき報を得てよりぞ、我が追慕の情はいとゞ切かる、烏べ山の煙あだし野の露の消え易けれど、今日は人の身の上と思へども、定めかき世は飛鳥川、明日は我身の上とかりて、やがて友が跡を追ひゆくことゝかりぬべし、窓ふく風には友が心やしひつらん、夕さびしき鐘の音には友が魂や乘りつらんと、朝に夕に友をかん慕はるゝに、ましてや此頃の空のしめりがちかるぞうたてき、白雲を望んで太息すれば、滂沱たる數行の涙せきあへず、月や時ありて復出づべく、花や時ありてまた咲くべし、さはれ此の綿々たる恨みは盡くる時あるべしやは、夕に西方淨土に入り玉ふ日は、朝に再び拜せらるれども、あはれうたてや一度西方淨土に入りにし友を、我は遂に見ること能はず、眼に映ずるは只これ友が遺稿のみ、かたみこそ今はあだかれ、是かくばと思ひては、手にせるをば抛たんとすれども、尙さりともと思ひ、繙きてその詩文を見れば、はや涙のみ堰き來り、袖に時雨の絕え間もかし、伯氏が絕絃し、季氏が掛劒せしも、うべやとこそは思はれしか、あはれ友よ、我が切かる心情を酌みとりて、半夜夢結ぶ折、枕頭に髣髴として生前の面影を現はし我が追慕の情を慰めてよ、我は車輪の零翕を以て蹁躚翱翔し、瞭々高く鳴いて、我を訪ひてよ。

空うち仰げば、嬋娟たる眞如の月は、いよ〳〵清うして鏡のやうかれども、我が胸を鎖せる愁ひの雲は、凝りて晴れやらず、帛を裂くが如き杜鵑の聲、汀にゆらぐ枯葦の音は、さかから我が爲に悲哀の歌を唱ふるかと聞きかされつ、あはれ蒼茫たる川兒淵の水、我が千の恨を長へに浮ぶるか嗚呼。

忍ぶ草

第五年級　山本香雨

久方の月日の推しうつるは、緒車のめぐるやうにて、菅の根のかがき春の日もとく過ぎ、陽炎もゆる夏の日もいつしか暮れて「昨日こそ早苗とりしか、今日は早や稻葉そよぎて秋風の吹く頃とはかりぬ、歸雁は瀟湘の夜月に怨をかさね、孤猿は巴峽の曉霜に涙をそゝぐもの心ある身は、あはれふかき秋の痛ましからぬかは

まいて、今宵は望月の、隈なくてらす更けゆく空の、「我身一人の秋にはあらねども、影をし見れば千々に物こそ悲しきに、そゞろ千とせもと頼みし友の、飽かぬ別れにあひし事ども思ひいでゝ、えもねられぬまゝ机に倚りて、其やうを一ふし二節、かきしるす事とはなりぬ。

わが片腕のそれにもまして親しき男の子の友、名は喜一郎といへり、汝とは筒井筒ふりわけ髪の昔より、親しかりしにはあらねど、交りそめてより、共にむつみしは四とせが間なりき、初めのほどはさほど親しからぬものを、いかなる故なりけむ、さながら夕ぐれのとばりの静かに引かるゝがごとく、かたみに親しうなりけるなり、思ひぞいづる、去んぬる秋、君がおわし給ひし言の葉こそ、その文にはげに興ある文字――まことと深き情のあふれむばかりのことぞ書いつけられたるその折の文みては、そゞろ泪の催さるゝも、わが僞はらぬまことなりや、會心の友となりて、いざ後の世までも交りてむ、苦しき時は共に泣き、樂しき折はともによろこび、かくて涙も別たむ、歡喜も別たむとこそ誓ひしは、思へばもぎし秋より後のことなりしか、君は常に云ひ給へり、われらが間にはもとより隔てなどいふことのはばかりもあらじ、よしやたらちねにはらからにも言ひがたき秘密なりとも、語りあかさむに何苦しかるべき、たゞいかなる場合にても、われら二人は長しへに一身たらむ、さればいかなる苦しみも悲しみも共に別ちぬべし、かゝればわれらはこの世にまじはりの模範ともなるを得む、とこの言こそ世の常の人の云ふべきものにあらざりしか、君はげにこの誓ひに背きたることなく、吾をいつくしみ玉ひぬ、年はわれと同じけれども、文かく事にもいでゝ、世故にもなかゝに長けたり。さはれ君と交はりそめてより、常に誓ひの言は仇にえせで、悲しき時は共に泪を別ち、樂しき折はともに笑をも別ちて、あるときは彼を慰めつなぐさめられつせしは、噫いくそばくぞ。げにも僞なの世や、うつゝなの世や、君には夙くより都に學びねけるが、悲しくも病に犯されて、この春故園の地にかへり給ひき、家を出でし時は業ならではふまじと誓ひし故里なるべきを、泪をのみて――しかも病を得て彼やむなしく戻れるなり。

飛鳥川ふちせ定めぬ、世はいと果敢なしや、歸りし後は煩ひとみに重らせ玉ひて、今しも身まかられぬと云ひ越したるに、あなとばかり胸つぶれて、取るものもとりあへで馳せ至れば、うちたゝく鐘の音はあはれにひゞきて、香の燒物淋しう立ちのぼりつ、泣きさけぶ人を餘所にして夢の如くなりし彼君は、白妙の薄衣に、空蟬の假の姿をとゞめて、さすがに昨日の事しのばるゝにぞ、二目とも見ずひれ伏して、言ふべき言の葉もえ知らで、泣きつくづれつもとの雫するの露の何時しか消えぬべき命とは兼ねてしれども、先たゝじ後れじとちぎりしものを、あはれ如何でか君ひとり、戀ふる己をあとにして、かへらぬ旅にゆきたりけむ、久しかるべき浮世ならねば、左なきだにうつろひ果つべき花なるを、なほど春風の心なく蕾の中に散しけむ、ありて甲斐なきおのれだに、一日ばかりの命をも長かれとあむ思はるゝを、才識ともにたちまさり、文の園生にかほりそめ末たのもしう諸人の心をよせし楠木の、二葉の中に折れましゝ君が心の悲しさよ、と、われにもあらで泣きふしぬ、されど、斯くてあるも甲斐なきことゝやう〳〵思ひ直しつ、やがて寄りつどひて身寄の人々と共にあすのはふりの設けなどす、見るにつけ聞くにつけ、ありし昔を忍ぶなかだちならぬはなきに、空にしられぬ小夜時雨、かわく間のなき衣手をしぼりつゝ一夜を明しぬ。

晝すぐるころ、友の柩は西凉寺といふ野邊に送られつゝ釋迦已に逝き彌勒いまだ出でず、塵の世とは云ひながら「たゞたのめしめぢが原のさしも草、吾世の中にあらむかぎりは」の誓ひの末には、枯れたる木にすら花さくとこそ聞きしが、よし前世の戒行拙かりけむとはいへ、かくまでらうたく、かしこかりし我友の、茶毘一片の煙と消えしこと、いかで痛ましからざらむ。

あはれ思へば三界は一空のみ、何物か果して常住不斷かるべき、甘泉殿の花も痴風に破れては露泪にむせび、驪山宮の月も莊雲にかくれては蹇古を吊ふ、諸行無常の世とはいひながら、人ばかり果敢かきものはかし、つくづく身を觀ずれば、岸額根をはかるの草、命を論ずれば江頭つかがざる船のみ、春のあした花をめづる人も、夕には北邙の風に失せ、秋の宵月を賞する人もあかつきには東岱の雲にかくれむ、花の散り月の缺くるをも待つものかは。

月やあらぬ春やむかしの春あらぬ
我が身一つは本の身にして

（伊勢物語）

と詠みたる歌ども思ひいでゝ、硯に落つる泪しげく、はこぶ筆さへ澁るゝまゝ文かきおく、折しも軒端にすだく蟲の聲々いとあはれにて、隈なく照らす月かげまで、何とおくおぼろ氣に見えたり。

佐和山登り

第五年級甲組　金谷杏甫

吁思へ、自然は如何かる慰籍を吾人に與ふるかを、如何に其風姿は塵滿つる濁世の人をして、無言の裡に敎化し、神心を清淨からしむるかを、徒に人世の汚醜の淵に感染し煩累に得忍びず懊惱に轉輾する輩よ、神に一日の安息日を請ひ、世の紛々を投打ち、自然を友として汚れに汚れし汝の膓を此清風明水に洗ひ盡せよかし、自然は常に喜びて汝等の來るを待てるかり吁悲しむ勿れ、怒る勿れ、憂ふ勿れ、狂ふ勿れ、而して暫時此所に遊べ、其所に如何ばかりの慰安あらん、希望あらん、光明あらん、さればこそ我は常に一分たりとも閑暇ある毎に此神境に放歌高吟し、未だ曾て半夢半醉の間に一瞬も徒過せしことかかりき。

神は幸に吾人を愛惠するありて、茲に夏期五十有餘日の休暇否安息日を與へたり、吾人此期日を徒過し、神の御心にそむきて可からんや、依て仲秋十五日を期し、午後孤杖を引き飄々乎として門を出で、名も高き佐和山にと向ふ、弓手の方には山岳幾重にも連りて道路に沿ひて走り、右手の方は一面水田にして其盡くる所は琵琶の太湖とかす、稻葉はそよ吹く風に波を生し翠碧萬里その際涯を見ず、やがて松並木の間を過ぎて、梅に名を負ふ矢倉村に至る、若しそれ東風樹梢を動かし、春和晴朗、梅蕾綻ぶるの候に到らんか、遊人菌集する織るが如しと雖も、今や地上の土と化し、雜草爲に生ひ繁れるを見るのみ。

想ひぞ浮ぶ、其昔謁道の聲樹下に響き、意氣揚々土人を叱咤し、去來の人馬絡緯たりし東山道の大路も、夢一瞬の間にして、稀に殘る家は、門前草深うして、虫の聲々恨みつゝ、屋壁半は地に落ちて再び土と變じ、人も昔の人からず、昨日の淵は今日の瀨とかる世のからひ、軒下につれる草履草鞋は、恣に蜘蛛の糸を引かし、店に並べし駄菓子は風の吹たつる土灰にあふはれ、旅人宿の行燈は、柴焚く煙に塗られ見るもあさましき有樣かり。

鳥井本驛を過し頃は日も早斜にして、切通阪の樹々の間に見ゆる四五軒の賤が伏屋は淡靄の中に包まれて、農夫は稻波を破りて歸り來り、子守は稚子を脊負ひ田の母を迎ひに行く、淙々たる谷川の水面を掠めて吹く夕風は、流汗を拂ふて領袖に入り、夕告鳥の鳴く聲は、宛ら遠來の吾を迎ふが如し、氣息奄々、遂に山頂に達しぬ、今や行人稀にして絶壁の中央に巖を深くうがちて安座せる地藏尊は、夜とかく、晝とかく、下界を絶へず守りて通行者に對して慰安を付與しつゝあり、彼の欝々たる樹間を脫し阪上はからずも、此神に相遇せし時の我感か如何に、堂の傍に茂れる松の梢には一疋の蟬、明日は蟻に引かるべき、今日一日をかりの命とか、氣高き聲をはり上げ、夕日に對し鳴くも感深し。

此所より道を轉じて右手の方に行く、道愈細くして益々嶮惡あり、顚躓數回、勇を鼓して絶壁を上り、嶮巖を攀ぢ流汗を排して進む程に、漸くにして佐和山々巓に達す。

東北には伊吹山巍乎として雲際に聳立する下、千山萬嶂之を回繞し、東方一帶連山にして、山の外に山ありて盡きず、西南彦根市街の白壁蒼甍は遙に西江洲の青螺と相對し、其間綠碧一帶の太湖を湛へ、嗚呼井伊公三十五萬石の城下、今や空しく廢城殘壘とゐりて昔日の俤を留め、芹水涸れて砂しろく宛轉長蛇の湖に望むに似たり。江盡きて桑田十里、其盡くるところ、磯山の江嶂を起し、其山足南北に延びて長汀曲浦とゐり、波光松影互に相映じ、水清く、松翠に、漁歌遠近に聞えて、眞帆、片帆、沖ゆく舟、島がくれ行く舟、蝴蝶の春の野に戲るが如く、白鷗のかけるが如し、且つ奇巖水中に聳え、巨石水面に横はり、半身を沒せるもあり、全身を現はすもあり、其狀餓牛の草上に臥するが如く、大龜の水に浮ぶに似たり。

嗚呼かの身を一雛僧より起りし石田三成、遂に扳擢せられて五奉行の一とゐり、此佐和山に封せられ、鐵馬金鞍に乘り、鞭を上げて虎嘯龍吟せし處、旌旗堂々天に飜り、長鎗大劍、旭日に閃きたる邊、星霜を經るこ

ところに三百歳、虛しく荒れて秋風徒に枯骨を吹き、斷碑昔日の恨を止めて、古苔蒼然其俤を殘すのみ、それ細雨霏々として花を叩く春雨には、武者草鞋朽ちて菫の床を作り、落葉飄々として風に舞ひ露花草上に轉ふ秋風には朱簾破れて淺茅が原、鳥のふしどと荒にける。無限ゐる天地は常に活動し、有限ゐる人事は其變遷恰も白駒の塲をはむが如しかの雄圖一世を蔽ひ、大陸諸國を壓倒せし、豪健兒も、消えて跡ゐく、セントヘレナの孤月は、今猶彼が墳墓を照し、金殿玉樓に住し、觀喜逸樂に耽りし秦の始皇も、今や廬生が一炊の夢に過ぎずして、蔓草殘壘を埋め、鴟梟切りに荒屋に叫ぶのみ、噫富貴はもと之れ浮雲のみ、權勢は流水たるに過ぎじ、又何のよる所かあらん、實に世の變遷極りゐき、人力の得て知るべきに非ず、我今幾百年の後、

庶くは古人に相遇して、心ゆくばかり其感慨を述べん哉。斜陽既に比良山頂に沒して鸞禽聲靜に、紅に燃えし湖面も暮色に包まれ蒼然たり、我は自然の微妙にうたれ、歸りを忘れて茫然たること多時、遂に已むゐく歸路につき、麓に到りて峰頭を回顧すれば、一痕の明月松が枝に懸りて其色蒼し、折から何くよりともゐく、響き來る款乃の聲、やがて一扁の漁舟、磯邊に漕ぎつけぬ。

靈妙の氣、至美の景、悲慘の感、無限の力、これ皆自然界の風姿ゐる哉、噫笑はんと欲して笑ふ能はず泣かんと欲して泣く能はず、賞せんと欲して賞せられず、悲まんと欲して悲しむべからざるは、自然界中唯此佐和山のみ有する所ゐらんか、あゝ佐和山、佐和山。猶幾多の閑日月をえば、再び汝が威靈に接觸し、疲心を醫し、汚腸を洗はんがため汝が特用の良藥を服せんかゐ。

湊河原

四學年甲組　澤野好三

草木の葉、黃ばみ落ちて、雁聲悲しき秋の日に、神戸の市に宿る、その翌日、名にし負ふ、湊河原を尋ねむとて、心隔てぬ友垣と、ともにいたる。

望み見れば、河は水涸れたれども、礫皆美しく、あだかも素練を布きたらむが如く叢は堤のところ〳〵にあり、千歳の霜、に逢ひし老松は、或は、龍の天に昇らむとせるが如く、或は、虎の嘯くが如し、千草の間には、たゞ幽に、絲より細き虫聲を聞くのみ。

河の流れも、菊水の、紋に逆まく、水煙、と歌ひてし、その水煙の跡も、あはれ今はいづくぞ。

思ふ、延元の昔、御世の亂れに、櫻桃も、はやく梢を謝して、うきの色にや出でけむ、新綠にそゝぐ雨、降

りつ、止みつ、霽れ渡るてふ望も、いとゞ覺束おきに、たゞさへ雲行きけはしげおる空は、徒に、杜鵑が血を吐く聲のみぞ頻りおりけるさつきと云ふに、旌旗天を掩ひ、舳艫相銜み、雷の如き叫聲、電の如き刃光、箭は雨の如く、弩は風の如く、その狀果していかゞおりしか。

この時、正成公は、海往かば水づく屍、山往かば草むす屍、額に矢は受くとも、項には負はじ、と命を鴻毛の輕きに置き、義を千鈞の重きに比して、肉を爛らし、血を漂はして、戰へども、衆寡敵せず、遂に、刀折れ矢盡きて斃るとも、尙、七生を誓ひて、大節を全うし、莞爾として死につかれしも、こゝかれや。

その赤誠もゆる如き胸と胸とを、合し、秋の水の如き刃もて、刺し違へしときの心や、如何おりけむ、鮮血淋漓たりし血は、いづこに流れしか、そこの草むすところか、こゝの白砂の上か。

虫よ心あらば、その慘憺の樣を告げよ、松よ、言葉あらば、語れ悽絶の光景を。

矢叫の空にひゞき、突進の聲の、山岳を震はしゝ跡を、今は、たゞ松聲の蕭々たると、虫聲の唧々たるのみ。

こゝに、余は懷舊の念に堪へず、仰いでは、延元の昔、公の忠節を慕ひ、俯しては、逆臣の不逞を恚り、切齒扼腕、悲憤交々至り、暗涙の衣袖を濕ほすを覺えず、と見れば天地憂ひ、草木悲しめるが如し。

嗚呼、絹張山に、咲く花も、扇が谷に、散る紅葉も、げに浮世の習を、示すとは云へ、もし當時、公の策、用おられおば、亂臣賊士、跡を後世につがざりしおらむ。

されば、公の逝去のこのかたは、眞如の月も、爲に光をかくし、爛熳の花も、爲に香を失ひ、後醍醐の帝の、御劍を按じて、崩せられしぞうたてき。

爾來、星移り、物變りて、雪霜を經ること、こゝに數百年、其忠魂は日月を貫き、義膽は鬼神を泣かしむ。

あはれ、この忠魂と、義膽とは、藻鹽燒く蜑が子にまで、言ひ傳へられて、末代までかゞやくこそ、めでたけれ、おゞて、湊河に死せしを、悵恨せむや。（了）

晩夏の半夜

第三年級　倉橋藤治郎

茜さす夕づく日、今し飯道寺の山の端に沈み行く。バッと照り返す名殘の光に、久方の西の御空も、いや高き山々も、綠り濃まやかおる森も、林も、野も、畑も、皆貴き黃金の色に輝き、余りの光は、柚川に一すじの黃金橋をかけて、向ひの野路を通る巡査の佩劍に、まぶしく映ろへり。其黃金の橋はすに橫ぎるあたり、時に銀鱗一條潑溂として空に飛べば、黃金のさゞ波圓く紋を畫いて、次第に大きく、次第にかるく、河の彼方八千草匂ふ岸の邊を、力おげにさら〳〵と洗ひて消ゆるおり。

我は今入日を送りて、あてどおくさまよう、靜まり返る大空の波をゆるがして、海藏寺の入相の鐘、……其は例の可憐おる尼の撞く……木立を洩れて鳴り渡れり。

あはれ思ひ多き入相の鐘よ。汝が無限の思ひを其の音に込めて鳴り響く時、例ふれば、眞白の衣をひき、丈にも余る白銀の鬚垂れたる天使ありて、……人の子よ、戰ふを止めよ、働くを止めよ、農夫よ、家路に着け、諸鳥よ、塒に歸れ、牧童よ、牧場に急げ、樵夫よ、麓の里に下れ、夜の帷垂れこめんとも、平和を得よ、快樂を得よ、……と叫ぶが如く、世の人は、如何に無限の慰籍を感ずらん。

殘照次第に影薄く、奈良ヶ原の峯續き、早や蒼然として淡き夕靄に包まれ行く。

おちこちの伏屋には靡く夕餉の煙はいと太く、豊おるべき今年の秋を祝ひて、末は色同じき靄の中にかくれつ。

ちらほら我前を過ぐる野良歸りの農夫、輕く會釋して通るも心床しや。あゝ彼等は幸ひある哉、平和に生れ、平和に育ち、神の御手に成れる自然の野に耕し、終日營々の汗を、行水の湯に洗ひ落し、夕顏棚の下涼み、園爐裏の傍のまどひに、濁酒一杯傾け盡し、一家和樂の內に、此世を辭する彼等は幸あらずや。彼等は大勇者ある哉、酷暑烈寒の日も、花笑ふ朝も、月冴ゆる夕も、彼等は唯五千余万の同胞のため、天災と戰ふあり、地變と爭ふあり。彼等若し鋤を投ぐれば如何に、田を顧みざれば如何に、花顏玉容の佳人才子も肉落ち骨立ちて見る影もなく、拔山蓋世の豪傑も、勝を千里に決する英雄も餓に泣くあるべし。彼等は福者ある哉、錦繡衣はあらずとも、山海の珍味はあらずとも、大厦高樓はあらずとも。健全ある彼等には、之等のものも要するに「不要」あり。ましてや着るに綿衣あり、食ふに麥飯あり、住むに伏屋あり、嗚呼彼等は幸多き哉。

汝等農夫よ、猥りに村校の先生を羨む勿れ、僞君子を思ふ勿れ、假令似而非紳士は勞働を卑しむとも、醜業婦は土臭しとて嫌ふとも、投機業者は薄利の業に甘んずる意久地なしよと侮るとも、知らずや、自然の神は幸多き汝等をより幸多かれと守り給ふものをと、彼の可憐ある農夫に濺ぐ同情の念むら〳〵ときざして、果てしなき思ひに耽るうち、世はとつぷり暮れ果てゝ、鎭守の森の梢に一つ、山の上に一つ、新星きらり顯はれぬ。

と見れば、目前の町家にも、山近き農家にも、燈の影漸く繁く、右に左に人の往き來して、燈の見えがくれする樣面白し。

町の子四五人、蝙蝠取るとて走り行くに出遇ひぬ。程もあらせず、東の山の木の間少し明を帶びて、さし上る月の桂、た靡く雲の裾押しあけて、輕羅に包みし鏡の如く、柔かき其が光を塵沈みし世に投附けぬ。兎イうさぎイおアにを見てはねる、十五夜お月さん見てはねる……町の子里の子打ちむれて、自らも兎の如く跳ね廻りながら、涼しき聲に斯く歌ひぬ。さても今宵の月の見事あることよと我は叫びぬ。

慕はしき月よ、御身は我等の恩師あり。御身の示す慈愛の相は、善く悶ゆる乙女の胸を慰し、平和の相は、善く疲るゝ人に安慰を得せしめ、貴く氣高き相は無智の人の胸に情の泉を湧かしめ、曇りても出で曇りても亦出づる其姿は、善く失望の若者をして、新らしき希望の光明に浴せしめ、更に花に伴ひ、柳につれ山に現はれ、草に宿りて、諸びとの心を樂しましめ、詩人の吟懷を肥やさしむるもの果して幾何ぞ。

されど御身も亦罪深からずや。滿天の秋氣、白露冷に、過雁數行雲にかくるゝあたり、越の山能の影模糊として、懷郷の念抑ふるに術なく、遮莫……と寂しき聲を鬚强き唇に洩らさしめしも汝よ。雲山万里かけ隔つる唐土の海邊に、感慨無量の游子をして、三笠の山に……と歌はしめしも汝よ。怒れる波は岸を嚙み。荒ぶる波は天を磨するセントヘレナの磯邊。嘗てはインポシブルある語は吾が字書にありと叫びけん英雄の心緒を、麻の如く亂れしめしも汝よ。昔の事は目に見得ねど、今も尙、多熱多情の靑年をして、不遇の若者をして、濁世を怒る男兒をして、恨みと嘆きと涙と厭世の念とを增さしむるも汝よ、月見れば千々に心の碎けゝり、何等悲壯の語ぞ。

端なくも、月に恨を述ぶれど、月更に關せず、已に中空に懸かれば、世界は辛くも暗より逃れ出でつ、靄より靄に流れ行くある柚の川は、宛として銀蛇の如く、月影宿る波の穗の吹きくる風に碎けては、金波銀波瀲灩として生ず。見渡せば、遠く翠岳のうす靄を込めたるは、簾を隔つる峨眉の如く、白雲一抹之を繞れるは佳人の柳腰に錦帶を纏へるに似たり。田畑森林あらゆる森羅は、今茫乎として大海原の如く、其間の一軒家は、波に漂ふ捨小舟にも似つるかな。

斯て我れ矢川橋上に立つて、夜の自然の景に見とる、折しもあれ、朦朧たる西岸の綠樹を通して笛の音聞ゆ。

微妙なる其音、涼風に連れて益々明になりゆく……一節は急に、一節はゆるく、烈風花を誘ふて散るが如く、霰笹野を辷るに似たり、或は岩にせかるゝ谷水の如く、或は岸に激する荒波に似通ひ、峯の嵐と亂れ響き、荒野を渡る風とすさぶ、或時は慕ふが如く、恨めるが如く、絶えんとして絶えずる事縷の如き聲は、やがて又一般の勢をまして、血に鳴く不如歸の一聲に似たり。

いとも冴えたる其音には、月界の女神も天下りましやせん。いとも妙えなる其調には、天津乙女も舞ひやせん。さてもいみじく調べたる其一節に、風神も心ありてか、松籟の音はたと止んで、唯杣川の流れのみ、涓々と音立てゝ、遠く〳〵流れ行く。

時に薄絹の樣なる浮雲、月を掠めて去りぬ。唯無心に似たる一片の雲、されど清に脆き我目には、我を敎へ勵まし給ひし夏の御神を乘せて、暗冥に走るかと見え、感愈々深くして胸は愈々亂れ、歩むともなく橋上を往きつ戻りつすれば、切々漕々の彼曲は、流韻長く四圍の空氣を振はせて、靄の彼方に消え去りぬ。

あゝ斷腸の曲は卷き閉ぢぬ。榮えある夏の御神を送りてかの如く……

月は又雲に閉ざゝれぬ。

仰げば北よりかけて一帶の天の河南に落ち、星斗燦爛として、銀の砂か、天上の花か、やさしき小さき光を放つ幾千万点。

夜や更けぬらし、衣の裾しつとりして重しのさらば歸らんかなと歩を運らせば、道傍の草葉に少く露の、袖にふれてはら〳〵と落ちて行く、あはれすげなき事してけるよ。

春と秋と

第三學年　野間莊三郎

長閑けき哉春！雲か、烟か、將た霧か、彩霞靉靆たる處、淺黄櫻の色匂ふ空に、友よぶ雲雀の囀れる、若葉の陰に小羊の眠れる、いと長閑なり。梅花三輪月半痕、薫れる風は鏡なす、池の渚に淺綠の、柳の髪をぞ梳る。朝日に匂ふ山櫻、紫匂ふ園の藤、八重山吹の花ざかり、岩つゝじ咲く山のかげに、見よ！　駘蕩の春霞、聞け！囀喨の春の曲。

樂しき哉秋！　野には米の實れるあり、野人壤を擊つて、笑うて、太平の歌を謳ひ。肥馬天風に嘶いて、勇士十年の昔を追懷す。鴻雁啼き叫ぶ八重霧の奥、黄葉、もみぢ葉、さおから立田姫が手染の唐錦のごと。操守れる白菊の花、いとも氣高く世に香る。桔梗、苅萱、女郎花、紫紅藍白咲きほこれる秋の野に、見よ！爛熟の花の色、きけ！清澄の秋の歌。

果敢なき哉春！　入相の鐘が響けば花が散る。「明日ありと思ふ心のあだ櫻」、爛熟たる紅葩、一夜の嵐に泥土に委し、一鳥悲しげに啼いて飛ぶ。夕そぼふる春雨濛々、鶯老いて、花ちりて、暮れゆく春の、果散なさよ。

悲しき哉秋！　金風颯々、梧葉飄零の夕、切々唧々たる蟲の聲、訴ふるが如く、泣くが如く、悲しむが如く、愁ふるが如し。我身一つの秋にはあらねど、げに月見れば千々に物こそ悲しけれ。過雁數行月三更、遠征の夫を思ふ擣衣の音、み空に冴えて、奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の、聲きく時ぞ秋は悲しき。

春は樂し、秋は樂し、春は悲し、秋は悲し。榮枯盛衰世の習ひ、宇宙の眞理は、明に此間の消息を傳ふ。樂しき春來り、哀しき秋逝き、樂しき春逝き、樂しき秋來る。かくて千古万來循環して逸するなし。悲、嬉、憂、樂、畢竟心の迷のみ。造化の神の、恵の御手に造られし此の樂園、春といはず、秋といはず、孰れ優り

劣りのあるべきやは。

旅行記の一節

第三年級　西澤虹橋

瀛車の小窓より、金龜城頭松が枝に、有明の月懸り、綠樹を載せたる冲の島は、只模糊として湖上に浮ぶを見つゝ、澤山の露おく若葉に思ひを托し、ゆかしき彦根をあとにして、出で立ちしは七月二十六日。瀛車は野を走り、山を過ぎ、川を渡り、幾多の里をよぎり、美濃路を跡に尾張路や、三河もはや打ち越へて、遠くも來つる旅の空、末は何處と遠江、駿河の國もはや過ぎつ、高くも登る足柄山、酒匂馬入も夢の中、かくて夜九時横濱停車場にと付きにけり。車夫の導くまゝに、一夜の宿を太田旅館にもとめぬ。されど假寢の夢徒らに多くして、覺むれば二十七日、一葉の船に病餘の軀托し、風雨不順なる天候に災ひせられつゝ、横濱港を抜錨しぬ。

行く手は、陸奥北海の沿岸、怒濤荒らぶる太平洋を横ぎりて、からくも三日、紅樓の燈火海波に落つる、函館港に錨と投じぬ。此間碇泊せし所、僅かに一ヶ所、そは風帆遠く天外に漂へる、牡鹿半島灣曲の一角なりき。村雨の蕭々として、瀛車の硝子窓をうちし、昨日の景色に引きかへて、今日は天氣うらゝかに、み空は萬里一碧、さながら拭へるが如し。

瀛笛一聲、瀛罐の火力漸次盛んになり、稍々動搖しつゝ、一縷の烟をのこして、櫓聲潮語終夜夢をみだせし港をあとにして進行しそめぬ、舳先に碎くる浪の音いと靜かに、天光水色上下相映じ、微風快き事云はん方なし

パノラマと言はんか、大畫圖と言はんか、甲板より見たる光景！

前面は雲のたなびく安房上総の諸嶺、渺々としてあるかなきかの山の影、海の光、或は入江に藍碧をなして、山中に灣を成せるそがあたり、磯に網引く海士が小舟、風を孕みて冲に漂へ白帆の影の三つ二つ、見えつ隱れつ浮べるすがた、宛ら一幅の畫圖のやう、背面の方を眺むれば、高潔儀相の富士の嶺、千秋萬古と雪を堪へ、峩々として雲表に聳ゆ、自分は是等の有樣を見たる時、如何に深き空想に耽りつらむ。房総半島の岬角をめぐれば、水天漸くひろ〳〵と、飛ぶ鳥高く翔り、太平洋上より吹き來る風強く、汀に寄する白浪は、飛ぶ鷗かとあやまたる。

船は針路を北へ〳〵と取り、房州冲も夢の中に早や過ぎつ、九十九里が濱邊に縫ひ來りぬ。夕陽今や岬角のかなたに落ちんとして、赫々閃々たる幾萬狀の光線は、浪路の末遙にきらめき、岸うつ波は、黃金をくだく心地せられぬ、やがて刻一刻、分一分、夕照の色次第に褪せて、黃昏は徐に催し、そが美はしき詩景は、夕霧のうす絹に包まれ、雲の色灰色となり、やがて夕霧は、濃き紫の暮靄と化しぬ、早や水際の方に、灯火の二つ三つ四つ仄めき始め、冲の水鳥、浮巢を求む、折しも食事を報ずる鈴の音チリン〳〵とひゞき、餘韻ゆるやかに波間に消えさりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾は臭氣ある室に居りぬ、されば浪の浮寢の寂寞と、臭氣とに堪へず、食事をゝへ亦もや甲板に出でたるに纖月淡く空にかゝりて、海は薄暗く、笑むが如き星の瞬きいと繁く、舳に崩るゝ巨浪の寂寞を破る響、天つ乙女の樂とも思はるゝ磯の松風おごいとかしまし。折り〳〵左舷の方に、見えては消え、消えては又水面を點らす、白色の燭火あり、何おらんと船僮にこを問へば、犬吠岬の廻轉燈臺なりといふ。

うべ、うの一角を過ぎんとせし時は、怒濤殊に烈しかりき。

あゝこの詩趣ある燈臺　絶海の畔、漁村を去る事數町、磯馴松の海風に吹かれ、細き枝振りを互に交へ居る半島の絶端、巉巖百尺、暴風雨の荒れたる夜かごは、怒濤の岸を崩す響、松の響、海のかるひゞき、其凄ましい力に殆ど燈臺が、吹き飛ばされんかと疑はるゝに、世の荒波に漂ひ果てたる老爺が、情を山水に喜ばしつゝ、猛風に肌を撫でられかがら、海にかやむ船人の爲めに、其夜毎の勤めを怠らぬさびしい生活！自分は殆ど想像するにも堪へざりき。

燈臺の燭火は、早や遙にしりへに霞み、我が近視眼には見えずかりぬ、さらばかつかしの燈臺よ、われ再び此潮の香に醉はむ時、清き慰籍の友とかりてよ、あゝさらば……さらば。

面影

第三學年　德永英

宵の程より降り出でたる雨の、今し、やう〳〵に晴れて、中天には月光さやかに下界を照せり。夜や更けぬらむ、万籟寂としてたゞ千草にすだく虫の聲高し。折しも秋風一陣、庭の雜木の梢を傳ひて颯々。

徒然かるまゝに、書齋の片隅かるふるき書冊かど取り出でゝ、とかう見る間に、ひら〳〵と中より落つる文書一片、何心かう讀み行くまゝに、奇しきかか、わが胸はいたくも轟き初めぬ、これや、實に我が亡き友のかたみ。

こと〳〵しう云はむも由かきことにはあれど、さても月日は、流るゝ水のそれにも似たりか。今は早や、幾春秋昔の夢がたりとかりぬ。君はわれより二ツの兄樣、幼き頃より馴れ初めて、遠き學び舍に文學ぶにも、近き小川のほとりに螢かるにも、何時とて四ツの袖を連ねざるは無かりき。されば兄とも思ひて仕ふるわれを、弟とも愛して二人が仲はいとゞ睦じかりき。されど、會者常離の定理に洩れで、二人がこの樂しき交りも夢の間かりき。綠陰濃かかる夏も過ぎ去りて、名殘を蟬の遺骸にとゞめ、悲雨蕭々、行雁空に鳴いて、又來れば秋のあはれを告ぐる頃、はら〳〵と音無き風に散る木の葉とゝもに、あはれや、溘焉不歸の人とかり畢むぬ。花からば蕾よ、三五の齡を一期として……。

其時の余が悲みや抑も……。思へば、われこの地に來らむとて、束の間の別れを述べむものと、君が住居を叩きしは、優しき君に接するの終りにして、又、床しき言の葉を聞くの結末かりしよ。其後とて尙文のゆきゝは怠らざりしが、常に元氣ばめる君にも似で、何とかう打凋れたまひしと見しは、實にやこの手紙、思ひきや、これぞ君が黃泉の旅路を急ぎしゝるしからむとは。

先つ日、われは學びの間を得て、こゝ俗塵萬丈の巷を去つて、懷しき故山の風物に接すべく歸りたりき。君と共に小魚釣りたる草野川の流れは、尙潺々の聲を放ちて昔かがらのすがたを變ぜず、両個相携へて茸狩に秋の一日を樂みたる洛滿山は、雜木いやに茂りて昔日の觀を改めず。さるに床しき友や今何處、寛來山麓、青苔滑かかる一介の墓石、これぞ亡き君の面影。

さてもうたてき人の世や、昨日は互に袖を連ねてあくがれし身の、今日は早や幽明界を異にして、天外萬里呼べど叫べどいらへなし。

世海今や荒れに荒れて、黑雲空に漲り、沿岸の燈光まさに消えかむとす。我は立ちて、この怒濤と戰はざるを得ず、九泉の友よ、からば來りて、長へに我が護りとかれ。

感慨交も湧きて、熱せし頭腦はために破れむとす、得堪へでふすまさつと開けば、下弦の月いゝ明かにし

て、虫聲一きは高く、連雁數行、月を縫ふて去りぬ、折柄、又も一陣の冷風松の梢に音立てぬ、あはれ友が叫びにあらずやも。

秋のいろ〳〵

第二學年級　小笹俊男

深山の秋。秋は何處も哀れおれどまして悲しきは深山の秋おりけり此頃の秋風に誘はれて緑おりし楓葉の紅に打かはり遠く見渡せばさおがら織姫の錦を、さらしたらんかと、うたがはれぬ夜三更の頃ほひ獨り山下の庵に居坐れば此頃はたえて聞えぬ松風も今宵はいと高く耳を打ち溪間にむせぶ岩清水水音高くあるは低く聞え白き泡とおりて溪より溪へと流れ行く折りしも月は雲間を出で輝きて錦織おす紅葉に一しほ光を添へ四邊にすだく虫の聲も今は聞えずおりぬ唯聞ゆるは峯の松風の溪間の水に音を合そばかりおりたま〳〵かすかに聞ゆる妻戀鹿の鳴く聲にも哀れさ彌まし世におき人の手向にもとて今を盛りの紅葉一枝を手折れば月朦朧として光おく物思ふ身の悲さ一入おり折しも遠山寺に響く無常を告ぐる鐘の聲に驚けば朝霧漸く濃にして深山の奥は秋さむし

秋の暮。小高き丘に登り澄み渡りたる秋の景色を眺れば空の色水よりも淡くしてかおたの田には苅ほしたる稻穗のかけに憩ひて煙草をくゆらす翁あり枯木を焚きてあたるも見ゆすゝきがくれの藁屋より立のぼる煙も物かおしきに何處の寺の鐘おらん聲もかもかに聞えものつく碓のひゞきおどこゝかしこにをこり旅おらぬ身も心ぼそしまして千里の外に親ある人はいかおらん

露のけしき。昔ある人の月ばかりおもしろき、ものは、あらじと云ひしに又ひとりは露こそあはれおれとてあらそひしと聞きしかげに露こそはかおきものは、おしされば ふるくより露の命おどゝはかおく消え易きものにたとへられぬ己れある日露のけしき見ばやと、とく起き出でぬあたりいと靜かにもやたちこもり己が吹く息も見ゆ萩の下葉にうるほへる露松の葉先に玉おす露ありとある木々より草葉に至る迄すきもおく置き渡したる其樣ゆかしくそゞろに吹ける風に露ふりはらふ竹ぞ昨夜の月を面白く宿しゝものかと思へばたゞ何とおくをかし

暮れ行く秋。きのふまで小女子が袖ふりはへてうかれありきし秋の花野もいつしか暮れゆく儘にさびしく女郎花を殘んの菊もあだおす風にうちくつをれいとゞわびしき夕間暮心みだるゝかりがねも深山に聞ゆる鹿の音も物のあはれと聞く程に板屋をたゝく落葉まじりに遠寺の鐘の音も幽けく見ゆるもの聞くもの萬身にしみて置きそめし小田のをもての霜の色これぞいよ〳〵秋に別るゝしるしおらんとそゞろに悲し

山里の春

第二年級乙組　近藤孝次郎

年かへりぬる朝のみ空、いとも清ふはれ渡りて、天地穩かに、我が大君が大御代は、巖の松のとことはに榮えますらむ。ほけやもろ共。謠へやもろ共。あわれ、目出度き今日の日を、誰かは祝はざる。誰かは樂まざる。日ごと〳〵ひくる小鳥の聲も、常にかはりてぞ聞ゆるに、南の窓がやれのひまよもるゝ朝こゝの、梅が香にうちかをりて、へやがおかみそにみち、いつしか、ちりの世たちはおれし心地おむする。やをら立ちて、そをあしあくれば、見わたしの門ども、松に、梅に、はた、竹おんど立て亘して華やかおるこそ、こよおう思えしか」いづくにまれ、常にめおれぬ眺めには、いつしも、心やられざらむわざおきを、ましてやと、あ

しのまにまにそこはかとおくす、ろあり く程、きよらかなる水のゆ、しうおがれゆきければ、添ひて、あしが。小路、賤が瀬戸ごも打過ぎつ、やがて、霞たなびく山の麓にいたりつきぬ。かたへの石の苔むせるに、しばしやすらう時しも、うぐひすの聲のほのかに聞ゆれば、遙かなる岩まが苔の細道を、ふりつもる紅葉ばの、吾大君が御めぐみにうるほひつるに、露そぼちつゝ、北ざまに、ふみ分け〳〵尋ねてぞ入りにける。向ふの山を見渡せば、をちは雪、こちは霞いづれも、やよいの花かとあやまたれてゐむ。あゝ、心地よき眺めよと、歩み運ばすばかり、賑ふ里が烟があなた、谷河を隔てゝ、千木高らかの杉森に宮をゝろかみぬ。社がたゞずまひ、いと神さび、祠官がぬかづく音の、いとやごとなくぞ覺ゆるに、遠かたより吹きよする嵐にほつかなうも、めでたの香、靜けき聲の聞ゆれば、世をさかるみ山の奥にあらぬとも、梅うぐひすに春や知らるゝなむと思ひやりつ、日の影うとましきまで、森がわたりにたちさまよひ、かへる鳥に驚かされて、溪を下りき』あはれ、思ひもかけざりし哉。山里の春かくも、あらむとは。起きては谷河の流れに、臥しては さやけき月に心を放ち、梅が香をふる山風は、窓ちかき青柳が枝に、日ぐらし吹きもさびて、鶯の歌ひにうちまじらうほとりこそ、をさ〳〵都の春にも劣るまじけれ。猶ほ、雪が日の日の出がけしき、四方、白がねのしきたへに飾られつる、あるは、彌生が花の盛り比、見渡す限り、てりにほふ薄くれなゐの霞が中に、春けくぞ鳥のなくなる、けしきに勝るけしきやはある。あゐ、のどけしや山里のすまひ。あゐ樂しきや山里のすまひ』

亡父を思ふ

第一年級甲組　居川市二

時は神無月の末つかた、ふる雨の音、凄々として軒に響き、酉の刻つぐる城山の鐘の音段々として幽韻を傳ふ、いとも淋しき夕まぐれ、すぎにし昔しのしのばれて、胸もさながら裂かるゝ心地ぞする。

思ひ出せば、今より十年の尙其れよりも二た歳の昔師走の末つかたなりき、わが無二の親愛なる父上は、ふとせしことより、病の床に伏し給ひしが、身は日日にやせ給ひ、頰の肉いたく、痩せ落ちて眼もあてられぬばかりなり……あゝ……今思ふに附けて眼前やせたる御姿を見る心地ぞする……思へば我六歳の暮のある夜なりき、雨は蕭々と降りしきり野寺の鐘の音は諸行無常とつげ渡る時、其の音と諸共にさみしき一笑を此世の、おごりとして、仇し野の露と消え給ひぬ。

其時我れ幼くてありけれど、あまりのくやしさ、おつかしさ、にせきあへぬ涙にむせびけり、母君兄上の悲み云ふもおろか……四隣寂々として佛檀の輪燈明滅し、くゆる香の煙、長く佛前に立ちまよひ、唯稱名念佛の聲、喪家の寂寞を破りて身心に徹し、愈々腸を斷つのみ、其後空行く雁の鳴く聲、後ろの森にねぐらを求むる烏のなく聲聞くにつけ、わが幼な心に、なんとおう心細う覺えけり。月を重ね年を經るまゝにいよゝ思は增鏡曇りて眼には五月雨のかわく暇だにかかりけり。

嗚呼今此世に居給はゞと思ふは、幾度ぞ、眞心こめて孝をつくし喜ばしめんとの心はあれどかいもなや、あゝ父上今は何所におはすらん、みゆずの園か極樂か

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

去年の春兄上我に語り給はく、われら二人は父に早く別れたれば假初の孝だに盡し得ず、最早や、此後は殘り居らるゝ母上を喜ばしめつ樂しましめつ、充分の孝を盡し、二人心を合せて勉めはげみ、行末社會に出で公益をはかり國家の爲めにつくして、聊か父に對しなき後の孝をつくさん、我は此家を繼ぎ祖先の名、両親の名をば世に擧げん程に、汝は、少し時期後れたれど、今より中學に入學し、孜々黽勉して有爲の人となれ

かしと、云ひ給ひし時、我は如何ばかり嬉しかりしぞ、期遲しとは云へ、我れ僅に十七歳の春あり、小野道風が高齡にて初めて勉めしを思はゞ、何の恥づることかあらん

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼今より後は專心苦學文の林にわけ入り、花を摘み實を取り、おき父上のたむけにぞせん。

漢詩

閑唫五首

第五年級　中村竹坡

春日閑居

桃花千樹小仙寰。黃鳥綿蠻聽自閑。日永春窓無一事。長唫抱膝獨看山。

江莊即事

亭枕桃花春水灣。烟波落日白鷗閑。湘簾高捲欄干上。仰見湖山月一彎。

養老山途上

路入濃州養老山。碧潺溪處紫苔班。寶臺香閣知多少。隱見錦雲紅樹間。

秋日過古戰場

低徊吟客不堪愁。古戰場頭斜日秋。當代雄圖空一夢。淡烟蒼月滿汀州。

琶琶湖畔

長江一碧夕陽流。水寺鯨者入客愁。秋老琵琶湖上路。蘆花萬點雪汀洲。

遊西明寺

第四年級甲組　飯村吳山

探幽紅葉白雲間。紅葉白雲處々班。雁塔龍池秋自寂。却疑身在小仙寰。

和歌俳句

こしをれ五つ

特別會員　文廼舍歌麿

雪深

降りつもる雪にあらしの音たゑて梢みじかき山のまつがえ

炭

埋火はさくらをやきし炭なれやむかへば春の心地するかな

春ト隣

隣まできにける春を告げがほに垣根の梅は咲き初めにけり

富士山

峯の雪ふもとの雲に駿河なる富士の高根のほどぞ知らるゝ

友人の家にて露西亞の海に產するかつか魚のかけるを見て

戰へばいつも勝つべき日の本の國を慕ひてかつか來ぬらし

向日葵集

野村雨城

おしみつる乳母にもらひし薔薇の花我にはあらず分つべき友

○

文字あせし菅の小笠を脊にしつゝ若僧ふたり都路をたつ

○

瀧壺にさかまく水の二千丈しぶきに舞ふよ散るよもみぢ葉

○

弘法の袈裟かけしとふ松老ひぬ松にちかめる僧また老いぬ

○

詩にかやむ姿とも見む向日葵の花のこゝろを誰か知らまし

○

我が宿の一本やぎちりそめて一のむすめは嫁入りにけり

○

石を撫でゝ遠きむかしを偲びては涙にぬるゝ袖二つかな

○

小雨ふる野田のほそ路を虚無僧の足ばやにゆく秋の夕ぐれ

○

夕餉たく烟かゝめに立つ見えて雨にきえゆく漁士の村々

○

三井寺の鐘のひゞきの湖に入りて勢多の長橋夕霧こめぬ

○

みるまゝに嶺の白雲くづれきていそぐ野路に夕立ぞする

第五年級 金谷杏甫

秋山の月

落栗をひろふ小猿の聲さえて峯にかたむく秋の夜の月

溪澗の落葉

山賤が薪脊おひて下りゆく谷の細道落葉ふりしく

水邊の月

見渡せば汀の葦のうら枯れて水にうつれる有明の月

第五年級 山本香雨

題知らず

菜畑は東に川は西にあり櫻かつちる夕月の頃

杜鵑

竹の月影ちる窓に歌かけば二聲かきぬ山ほとゝぎす

里の夕暮

川ぞひの柳の堤くれそめて土橋をわたる鄙うたの聲

海濱の夕

舟うたを唄ふいをり男の影見えて眞砂路一里夕日かゞやく

窓の月

歌かりて誦する學びの窓のへに白梅ちりて月おぼろかり

三年級　横田愼治郎

君が爲國の爲にと盡さばやわが命のあらむかぎりは

俳句

第三年級甲組　細江忠一

初夢や露國の城に日の御旗、

按摩笛幽かにかりて又哀れ、

桃太郎の話初じまる炬燵哉、

新體詩

即興

特別會員　澤村胡夷

（湖畔、さる里の、ある雪の夜のまこねに蓄音機をきゝて）

浪速の友や、京の子や、
湖邊の人もつどひきて、
東の客も座につきぬ。
湖の畔の町端、
雪の一夜の徒然に、
歡樂みてる園樂かな。
いま、動搖めきは靜まりぬ。
『いでや毛野村六介の、
戲曲に興ある物語』
浪速あまりに友說くを、
比都佐そだちの寺男、
聞きのがさじとにぢりよる、
※　※　※　※　※　※
白き指、そと、螺旋にふれけり。
一座、八人、口默れば、

饒舌おりお。蓄音機。

市にねませる詩人に

特別會員　澤村胡夷

兒守、兒唄に秋の野かざり
露と月影、野の秋かざる。

沼のあし間に、母、兒を呼ぶも
秋の日暮を寂しと說くお。

甕はにごれど情をこめて、
君にと、雪の夜も、たゝへし酒よ。

市に、詩人、もだえず、泣かず、
ちりにもの追ふ人の愚、說かで。

垂穗ぬかづく小路をこゑて、
こよひ、鎭守の森訪ひ來ませ。

若き女、若き男、よろこぶ秋の、
まどゐ、樂しき、群に入るべく。

修學旅行記

理事

第五年級修學旅行日記

第一日（四日）

朝より降り出でし雨の未だ降り止まざりしも、定めの時の近づけば、準備もそこ〳〵後れじものをと、停車場に至れば早や一行は概ね集ひ居たり。

午前十一時五十分彥根發の列車に乘じたり。氣笛一聲滊車は黑烟をはいて、小雨にけぶれる金龜城を後にして北に向ひぬ。大洞山は紅葉の錦を着飾りて、我等一行を見送り。日頃ホートを浮べて樂みし入江は、本日はどんよりと黑みし水の芦の間に見えつ隱れつするおご常に變りしことにはあらねど、五日余りも旅ねして親しき湖山の景に別るゝとし思へば何とおく名殘おしく思はれて、今更しく車窓より望まる。

かくて米原に着きぬ。暫時停車の後、再び出で長濱虎姬おごいつしか過ぎて、高槻に至りし頃は漸く雨降り止みて、雲の破れ目より、けうとき日の光の車窓をさしぬ。一同は最早や天氣も晴れとおるらしとて互に喜び合へり。

柳ヶ瀨に至れば山、四方よりせまり來て、たゞ其間を鐵路のうねり〳〵て通ぜるのみ。此處を發すれば近江

路は之に、終りにて、名にしおふ樫の木峠の隧道を過ぐれば越路に入りしあり。之より瀛車は一時に平地に出でしあれば其早き事云はん方なく、敦賀の町は早や余等一行を迎へり、此所にて瀛車を捨てゝ、停車場前の氣比神社に參拜しぬ。時に午後二時過ぐる頃なり。

赤き華表を通じて進み行けば、幾百年を經たりけむ老杉林々として日陰おほひ、小砂まじりの道路のしとやか濕れるは何とかう心地惡し。此道を少し行きて左に折るれば新しき石の玉垣もて圍ひあせる中に日清の役の戰利品なる大砲一門あり。其奥あるいと事そぎたる古き社こそ國幣中社氣比神社なる。一同恭謹拜禮し了りて、石階に腰打ち掛けて休み居れば、此所の神官にやらむ白衣を着け、頭に白髪を頂ける老翁の出で來り莞爾として語りて曰く「該社は此地にて最も古きものにて、神功皇后、應神天皇、竹内宿禰を祭れるなり」とか。老翁は尙ほ此れは何、彼は何と種々なる說明をも述べられしが、秋の日足の短きに行く先き急ぐなれば老翁に辭して、濱の手なる金崎神社に詣でぬ。此處は尊良親王を祭れるにて昔の金崎城の跡なり。社の裏に出づれば海上の眺望甚だ佳なり。前面を見渡せば、目もはるに白波高き日本海を望み、右にめぐらせば、岸に立てる山々は錦を着て水中に立てるが如く、其立脚は皆岩よりなり、石底を卷いて出づ、其水中に突出するものは熊罷の山に登らむとするが如く、或は牛羊の水に飲するが如し。左は白砂數町、綠松其が上に生じ松風颯々參差披拂志、影水上に撮す。其間を眞帆片帆の欵の靜かに行きこふ等將に一幅の好畫なり、かく天然の美景に對し、恍惚として見とるゝ間に、早や夕陽は西にかたむき、左岸の松原、右岸の山々のあたり夕靄棚引き渡りて何所にや晩鐘かすかに餘音嫋々として遠く響き、宿を尋づぬるにや晩鴉の聲しきりに本日も最早や夜の帷の中に包まれ初めぬ。急ぎ丸丹瀛船出帆所に至り、各乘船の準備をなしつゝ出帆を待ち居れり。

午後七時敦賀發の宮津丸にて宮津に向ひぬ。時に月東山の上に出で、斗牛の間を徘徊す。影水に有つては水底の珠玉の如く、蓮に映じては金銀波を漲らす、實に心浮くばかりの好景なり、加ふるに此夜は靜かなる梶枕とて心地よきこと云はん方なし。三十有余の健兒甲板に出でゝ舳に語らひ或は舷頭に枕して歌ふあり或は、吟ずる有つて互に相樂しむ。

月漸く中空にかゝり、船は益々進みて敦賀灣を出でゝ灣頭の燈臺をめぐり、日本海に出でぬ。さすは聞き及びし如く白波高く少し船の動搖するを覺えぬ。

夜も漸く更けしとおぼしく海風身にしみて、そゞろ寒きを感じぬ。九時頃より一人去り二人去り、今は早や果板上には人影なく、皆船室の狹きときたるとをかこちつゝも遂に夢路に入り、滿室鼾聲のみぞ高かりき。

因に記す、敦賀出帆の節同窓の友三浦氏より一同に菓子を分與せらる、此處に其好意を謝す。

第二日（五日）

夜深更天は默して地は眠り神去て人休し、乾坤閒寂萬籟沈んで聲なく、月は雲を通しておぼろげに幾多の青年が華胥の夢路を照らしぬ、漸くにして船は小濱港を出でゝ西に向ふ、鋸岬、成生岬は舟の左方にあらはれぬ、點々として水にうつれるは濱邊に海士のたくもしほ火なるらん。青葉山をめぐりて午前三時半長濱といふに付きぬ、夜山昏黑一物も見えず、やがてそこをもすぎて舞鶴港につきぬ時は已に五時半、星斗漸く光芒を減じ曉色幽かに乾坤を染めて微白夢よりも淡しの濃霧の中、点々たる光はこれ舞鶴なり左右の山岳海岸に峙ち灣内水深くして素人目にも要害よきを知らる。船は猶宮津に向ふ一行やうやく目さめて所携の握飯を食す船は天の橋立を右方に眺めて瀛笛一聲宮津港につきぬ時に午前七時半、船より下りて天の橋立に向はんとす一行の希望二分せしかど遂に海路より往くに決す舟子乃ち舟を艤して汀に迎へ、日は既に辰に及び乃ち發す

三艘の快艇片葉とやたとへん、舳艫相望み吟唱互に答ふ、此日天氣晴朗浪おだやかにして愉快極りあしやがて天橋に近づき文珠の切戸と云ふを過ぎぬ、こゝはこれ天橋の西端あり之より北を入海と云ふ、此所潮流はげしくして舟子力を用ゐる事急艫聲爲めに喧聒、過ぐれば即ち白砂青松前方より右方に連り天橋の名空しからず、やがて江尻につきぬ、上れば美麗ある一館あり暫く息ひて歩を移し國幣社籠神社に詣づ此より上る事數町にして山頂に達す、

腰を岩角に倚せて俯視すれば嗚呼これ何等の美景ぞや丹羽の海面金波跳り一帶の青松遠く海中に突出し、松樹は海波と蒼翠相連り竊人杖をひきて低徊す、首を傾け左顧すれば渺々千里日本海、大ぶね小ぶね眞帆片帆眞個に是れ一幅の好畫圖あり、これより數町にして有名ある成相寺ありといふ。山を下りて江尻村より天橋立を渡る、長さ十五六町濱の眞砂は白銀の如く瀝透として足の蹈む所滑かあり。老松は龍の幡まるが如く、白鷗波に戯れて其間に悠遊す、實に天下の絶景あり余曾て畫に於て此景を見私に筆人の虚畫とあす今此の所をすぎて反て其筆の拙きを覺ゆ、三松原の第一として世人に賞せらるゝも又宜あるかあ、歩むとしもはあけれども足の移るにつれてはや橋立の南端に近きぬこゝに稍ひらき所ありて一祠其中央にあり呼で橋立神社と云ふ、之れは三百年前の勇士岩見重太郎がかたき打せし所とかや、但し事の眞僞は予の保証する限りにあらず、此ひろき所には毎年地方の小學校の運動會ありといふ、あはれ此の絶景誰が爲めには爲られしぞ、昔時未開の世は交通困難ありし爲めあたら此絶景をして地方人士のみ恣にする所ありしに文明の御世とありて萬民等しく其景を賞するを得るに至れり、さても有福の身とやいはむ、此の絶景を見て古人はいかに感せしぞ

蕪村の俳句に

橋立や松は月日のこぼれだね

萬籟は曰く　橋立や幾松が根の友かゞみ

さしもうるはしき此の景色は對して心ばかりは早やれども推き筆のまはらねば名殘を松が枝にとゞめて惜しくも此所を去りけり。

橋立のわたしを渡りし所は名高き文珠堂のある所あり、堂は文珠菩薩を祀る此伽藍は地方一の大あるもの其年代もいと古しといふ杖を橋立に引くもの必ずこゝに其參詣す表門に「海上禪巖」と書せる大額あり、其境内亦ひろく右側に泉式部の墓あり。土人のいふまゝに名物の「ちゑのもち」二つ三つ食して腹肥やしつ、之より南十町宮津に歸る途に雨にあひてあはてふためく物もあり。

やがて宮津につきぬ宮津は本庄氏の舊城地にして歌にも讀まれたる名地、地方貨物の集散する所あれども、田園少く鐵路通せず人口萬に過ぎず、吾等は町の東端に進み大手橋を渡りぬ橋は明治にありて改造せしもの花崗石及煉瓦を以て造れり橋の東に石碑あり題して「改造大手橋碑」とあり碑文は當時の京都府知事從四位北垣國造氏が撰べるものあり橋の西ある大建築物は舊家老の住宅のありし跡にして宮津區裁判所あり、町を離れて東に向ふ、道路平坦砥の如く、左は宮津灣水滑かにして鏡の如し、路上の眺め又頗る嬋にして天橋立は白砂を綴りて遠く連り千鳥行きかひ白帆の波に隱れ行く樣の妙ある又見るべしとも思はれず、昔し小式部内侍は「大江山生野の道の遠ければ未だ」とよみたりしが、今は正しくふけ終りて其が遠望をさへ恣にする吾等の幸福さよ、山は綠にして水は清く悠然として余等の眼にうつりぬ。一の丘をこゆれば又橋立は見るべからずこゝに撥雲洞と云ふがあり長さ二町ばかりもあらん、通り過ぎて再び濱邊にいづればいづこもおおじ濱の柳の秋風にゆらるゝ樣や面白き、由良に近づくまゝに海濱は山水相迫りて吾人をして快哉をさけばしむ。見あぐれば怪巖奇石錯然として峙立し蹲するが如く踞するが如し而して石簿纔に土壤の存する所松樹幡屈し或

ものは崩れて落ちんとするの石を抱き、或ものは石を劈て自ら轉倒せんとす、水晶の如き清水常に其谷間より流るその景色の最もよき所を、桃島とす島は方半町亂濤を排して海中に突出し、岩は紫色を帶び數十の松樹頂上に生ひかゝり老龍の雲を出づるが如し、綠波は岸を洗うて渦を卷き實に造化の活畫あり、路傍に壇場を設け貴紳の之を眺むに便せり、遠く海洋を見わたせば水天一線に合し越前若狹の山々或は高く或は低く急ぐ足をも止めぬ人とてはあかりけり、白雲水にうつり松倒に立つ、さてもジエヂバの湖邊に似たるかな、されどこゝは舞鶴要塞地帶内あれば詳にこゝに記すことを得ず。

しばらくにして由良につきぬ町の長さ十五町、今日はこゝに宿るべかりしにさるべき宿も無けれは又も舞鶴へといそぎぬ、由良の町はづれに由良川あり幅二町水深くして氣船を通ずべし、河の右岸に沿ひて行く事一里餘にして中山につきぬ、そこより川を渡りて山間の近道をとり舞鶴に出づ山中暮色漸く至り前後左右を知らず、足はつかれはてゝ歩み得べくもあらず、さても如何せんと思ひし所舞鶴の町燈燦然として目を射ぬ、此時の心地如何ばかりぞ、親に別れし子の再び親に會ひたるもかくやと思はれぬ其情筆も澁りてつくし得ず今夜は新町内藤旅店に宿りぬ、一同つかれしまゝに夕食して床につきぬ、宮津より舞鶴まで道程六里餘

第三日（六日）

華胥の國を立ち出で午前六時半朝食し七時出發、八時氣船由良川丸に乘り舞鶴港を出で餘部軍港に向ふ、舟は白く塗れる一小美船あり灣は袋狀をなし両側丘陵を以て圍めり、船の進むにつれて野末のつゆまづ消えゆき立ちこむる白雲もやう〳〵分れきて葉山しげ島かつ〳〵船の前にあらはれぬ、ふりかへりみれば芙蓉の如き一山東方にそばだちつゞら折りに廣路山頂に通じ絶頂には要塞砲臺嚴然として据付られたり。

八時四十五分船は長濱につきぬ、港は山麓にありて汽船問屋の外一の家なし、此所より上陸して餘部に赴きぬ、さすが軍港のあるあれば一小漁村ありし餘部も今は道路廣く市街賑はしき町とありぬ、

東部に煉瓦の門あるは舞鶴海兵團あり、觀覽の許可を得て九時四十分入場せり、彼方の山麓に建てられたるは海兵團にして又左の方に見ゆる煉瓦造りは造機工場ありさても立派なる建築物よ、一兵士の案内に依りまづ練習用の大砲を觀覽しぬ砲口十五删又は　　删等數門あり、其說明によりて機械の精巧なると手入の行きとゞきたるとに驚きぬ、運動場は方二町もあらんか其より海兵團内を觀覽も建築新にして諸事整頓せり思へば今日は東京靖國神社の大祭あり耳うつオルガンの音心もにぎはしくラッパの聲に足をそろへたる兵士の二三人往き歸りするも又心たのもし。灣内を見れば千早、摩耶、鎭西、金剛の四隻の軍艦海中に錨を投げて煙突は高く雲をつき其勢雄々し。其より船渠を見んため灣をめぐりて北方に往く左側丘上に建てたる宏壯ある石を以てかためたり、側に水吸上機械あり復雜にして了解し能はず其傍らに煉瓦と銅とを以て築ける造機工場あり其中を通れば槌の音は雷の如し、時に刻正午を過ぎぬ依りて晝食して水雷團に赴きぬ。

水雷團はこの東方數町の所にあり、許可を得て拜觀す門の左方に水雷用の種々の機具を具ふ海上には海底浚渫船あり、海のほとりに團の兵營あり其汀に水雷艇第六十三、六十四、四十四、四十七、四十九の五隻浮べり、團の兵營はその構造軍艦を摸擬して造れるもの巧慮至れりと云べし。かくて軍港拜觀も終りければ東門より歸途につきぬ時に午後二時半、其道路の完全ある事前の如し、しばらくにして一隧道あり題して「其道大光」とあり其出口に「割然貫通」と題せり長さ二町又しばらくにして一洞あり「東西貫通」と書せり其一端には「千秋洞」とあり皆近頃通ぜられたるものゝ如し思へばさても軍備費の多き事よ、軍艦一隻にても數百万圓を要す是を他の方面に向けあば大學校や圖書館や慈善會を起す事掌をくつがへすよりも易からん、然も尙ほ